

論文

孔子廟からみる‘近世’琉球

○鎌田 出*1 伊藤 陽寿*1

キーワード：孔子廟、琉球の‘近世’、久米村と首里、質の異なる「儒教化」

1 はじめに

かつて琉球には二つの孔子廟が存在した。中国人華僑を出自とした者たちが集住し、王府から中国王朝へ向けた行政を担っていた久米村と、王都首里にである。久米村の孔子廟は1674年（康熙13年）^{註1}に、首里のそれは1837年（道光17年）にそれぞれ創建された^{参考文献1}） *以下参*と省略表記する。

創建場所が異なるだけでなく、創建年代が大きく隔たっている点で、両者の創建動機が大きく異なることは言うまでもない。ただ、従来この両者は「孔子廟の創建」というカテゴリーとしてのみ括られ、王国内における学問や教育の振興として位置づけられてきた^{参2), 3)}。また、孔子祭は宗廟祭祀などと並置され、「儒教的」国家儀礼として発展していくことが明らかにされている^{参4)}。

これらを受けて本稿では、創建の時代や場所がそれぞれ全く異なる両孔子廟について、創建に至った動機やそれらの存在意義を比較することで、琉球に創建された孔子廟が琉球の近世という時代のなかでどのような役割を果たしたのかということに迫って行きたい。

これまで、孔子廟の創建という歴史的な事象のみを指し、それが琉球の近世期における特有な事象であるという解釈はなされていない。一般的に捉えられている琉球近世の定義や特色は後述するが、このパラダイムのなかで「孔子廟の創建」というトピックを特化して論じることによって、新たな琉球近世の一面を探り得ないだろうか。

こうした見地から本稿では、孔子廟の創建に関連し

た歴史事象を‘近世’と表現し、新たな琉球近世史像を描く試論としたい。

なお、孔子廟について史料上では「聖廟」「至聖廟」と称されるが、訳などはすべて「孔子廟」で統一する。

2 琉球‘近世’の特色—先行研究から

孔子廟について論じる前に、琉球における‘近世’の特色を先行研究より明らかにしておく。

琉球の近世は、一般的に1609年の島津氏の琉球侵攻から1879年の日本による併合、すなわち「琉球処分」までとされる^{註2}。島津氏の侵攻以後、日本側の意図により、それ以前から行われてきた琉球と中国王朝による冊封・朝貢の関係が維持されたため、実質的に琉球は日中二大国による二重支配を受けるようになった。日中と君臣関係を結び、両国に「朝貢」^{参4)}することになった琉球は、両国への付き合い（御取合）を重視・実践した国家経営を行わざるを得なかったが、反面、そうしたみずからの日中の「狭間」^{参5)}にあるという立場を利用し両国との距離を取りつつ自己の国家像を確立していくことになる。このような日中両国のパワーバランスを前提とした自国の立場の確立は、琉球の国是として意識されるようになる。近世後期になるとそれは、琉球みずからが日中両国を「父母の国」^{参6)}と称するようになるなど、自己の立場を成り立たせるうえで両国は必要不可欠の存在となるのである。

だが、二つ以上の国と君臣関係を持つということは、中国王朝にとってあってはならないことであった。そ

*1 至誠館大学 ライフデザイン学部

ここで、島津氏と共謀しつつ琉球は、1645年に起こった明清王朝交替を機に、新興国である清朝に対し琉日関係を隠蔽する行動に出るのである。

ここで重要となったのが、日本と関係が無いということ清朝に対しアピールすることであった。日本人風の名前や風俗を改めたり、日本に因むもの、たとえば日本年号が銘記してあるものなどを隠したり打毀するなど、琉球は国内から日本色を一掃することに努める。しかしその代りに、中国を模した儒教色を強調することで日本との関係を隠すカムフラージュとし、同時に、清朝の徳化を受けた「従順な朝貢国」であるという演出をも行ったのである^{参7)}。

一方、主に18世紀を中心として、同時代の日本と同様に琉球でも儒学に則った学問が広く行われるようになる。こうした流れを受けて、王都首里に国の最高学府である国学を設置しようという動きが起こる。中国では本来、国学の隣に孔子廟が設置されるのが慣例であるため、19世紀に至り、首里の国学の隣に孔子廟が創建されるのである。

従来の「孔子廟」、あるいは「孔子廟の創建」は、琉球近世史の以上のような文脈から語られることが主であった。無論、中国に起源を持つ孔子廟の創建は、琉球における「儒教化」の一端ではある。しかし本稿では、孔子廟や孔子廟の創建を単に琉球近世史の文脈に位置づけるのではなく、むしろ逆に、それらから琉球における「儒教化」の内実、さらにそこから、琉球の『近世』を描き出すことを試みようと思う。

3 17世紀久米村における孔子廟の創建

孔子祭祀については、1610年（万暦38年）に久米村の蔡堅という人物が聖像を祀ったとする記事が最初である^{参8)}。蔡堅は当時、華僑集団の末裔たちが集住し、貿易や外交事務を担当していた久米村の最高責任者であった。彼は、中国に朝貢した際に孔子廟に上り、聖

像を絵に描いて帰国、それを久米村の家ごとに交替で祀らせたとある。

島津氏の侵攻以前、琉球は日本の禅僧が中国へ渡海するための中継地として機能していた。禅僧たちは、中国から仏教だけでなく儒学書や儒教的な文化を持ち帰っているため、彼らによって孔子祭祀の方法がすでに琉球に伝えられていたと考えられる。またそれ以前に、本来華僑集団である久米村人が、蔡堅が行うまで孔子を祀らなかったというのも考えづらい。ここには、時の国王の寵愛を受け、王家との関係が強かった蔡堅を『近世』における久米村中興の祖とせんがために^{参9)}註4、琉球の史書がみな蔡堅以前の孔子祭祀の存在を排除している可能性がある^{註5)}。

ともあれ蔡堅が孔子祭祀を行って以降、久米村のなかで交替で孔子を祀るという行為に対し疑義を呈する者がいた。孔子廟の創建を請願した金正春である。

金正春は、明清王朝交替期に中国に進貢し、福州にて清軍に捕らえられて北京の順治帝に謁見した人物である。さらに彼は、琉球帰国時に船が日本に漂着した際、中国の状況を将軍に報告するために江戸まで赴いた人物でもある。彼は、明清交替の動乱期に中国や日本を行き来した数少ない人物であった^{参9)}。琉球へ帰国後は、蔡堅同様に久米村の最高責任者である総理唐栄司の職を任せられる。この頃の彼について、彼の「家譜」によると^{註6)}、

公務の合間には常に経学（四書五經の学）を講じて人材を育成した。こうして久米村の子弟たちの経学は日ごとに向上し人材が潤った。琉球は海東の国ではあるが、礼学や文章はほとんど中華と異なるところがないのだ^{註7)}！

とある。これらから、金正春が、子弟への教育により琉球を中国と異なるほどの経学の国へと導いた人物として位置づけられていたことがわかる。

この後の1671年（康熙10年）、金正春は国王に孔子

廟創建を請願することになる。ところがこの年は、摂政の羽地朝秀によって大規模な国内改革が行われていた。羽地は、1666年から1673年までの間に、土地の開墾や緊縮財政といった経済の合理化を旗印に、冗費の伴う儀礼や政策を徹底的に排除しようとしたのである。こうした羽地の改革は奏功したようで、彼は1673年付けの口上覚で次のように語っている。

色々政策を行ってきたので、二三年のうちに民の生活は段々と成り立つようになってきた。これは私一人の私言ではなく諸人に見知られていることである。前々とは全く違う状態にあるのである^{註8)} 2。

この口上覚の出された年代が正しいとすると、ここで言われている2・3年とはまさに、金正春が孔子廟創建の請願を行った頃に該当する。このことから、孔子廟創建の請願は羽地改革の成功がある程度みえてきた矢先に行われたことであったとわかる。1671年になされた建廟の請願が却下されたという記録は無く、孔子廟のような大規模な建物を創建するという判断が羽地により下されたことを踏まえるならば、孔子廟創建は羽地による対清政策として位置づけるべきである。

1671年に請願された孔子廟の創建は、その後数年を経て完成に至る^{註10)、11)}。廟完成後の康熙15年(1676年)には、以下のような碑文が建てられた。

琉球国にはじめて孔子廟が創立したことについてくわしく碑文に書いておけば、中国の様式が叶い、いよいよ永年の国王のお考えが実現いたしますが、もし今のように碑文を建てなければ、年月を経たのち、孔子廟創建の様子や祭祀の由来を忘却してしまうので、そうしないように思いやり、万全を期しておくのです。今回は廟の大部分は茅葺きで行えとのことではございますが、中国の孔子廟のように碑文を立てさせていただきたく存じ上げます^{註11)} 3。

碑文の内容から、中国の孔子廟と同様に廟宇の前に碑文を建て、創建の経緯が忘却されるのを防ぐべきであるとの建議がなされたことがわかる。孔子廟の形式は、創建当初から中国の形式が強く意識されていたのである。原文にあるように、模範とされているのは「唐」^{註12)}のものであり、それが清朝や康熙帝とは直接結びつけられていないことを特に指摘しておきたい。

4 冊封使と孔子廟

4.1 汪楫と孔子廟

孔子廟の創建から10年余り後に当たる1683年(康熙22年)、世子尚貞を冊封するために清朝より冊封使の汪楫が派遣された。この時の冊封使派遣は、明清交替や三藩の乱、さらには台湾における海上勢力が未だ沈静化し切っていないという理由で、当初は見送られるはずであった。しかし、琉球の進貢使たちの請願により康熙帝の考えが変わり、一転して冊封使派遣へと事が動いたのである^{註12)}。

このように康熙帝には、もとより琉球を優遇する傾向が見られた^{註13)}。こうした経緯から、この時の冊封は、新興国である清朝が琉球を慰撫し関係を強化する意図で行われたと位置づけることが可能であろう。この点には留意しておきたい。

無事に琉球に到着した汪楫は、久米村に孔子廟が創建され、いまや国中が孔子を祀っているということを知らされた。彼は当初、琉球人が「至聖」としているのは孔子でなく別の聖人であるかもしれないと考えた。だが、実際に孔子廟に至り本尊が孔子であることを確認すると、彼は孔子参拝の礼を以って拝礼を済ませた^{註13)} 4。

琉球に孔子廟が存在することを確認した汪楫は、以下のように述べている。

①学校と廟は表裏一体である^{註14)} 4。

②康熙帝の教化により、朝貢国は孔子廟を創建せずにはいられなかった^{註15) 4}。

③これらは皆、清朝が中国を統治し、康熙帝の即位以後になったことである。これは康熙帝の盛徳大業が朝貢国を覆ったためである^{註16) 4}。

②と③から、汪楫は琉球が孔子廟を創建した理由を、清朝の建国と康熙帝の教化に結び付けて考えていることがわかる。さらに彼は、①について以下のような提案を琉球に行った。

廟はすでに完成しているから、廟を拓げて学校とすれば、費用をかけずに制度を整えられる。また、国中から礼儀や学問に長けている者を選び、子弟を監督し積菜や積奠の礼を挙行させよ。国のなかで適当な人材が見つからない場合は、清朝に昔の教育故事のようにしたいと乞え^{註17) 4}。

「昔の教育故事」とは、明代に行われていた、子弟を北京の国子監に留学させるという久米村の官生派遣制度を指す。この提案を受け入れ、琉球では官生派遣制度が復活する。

以上のことから、久米村の孔子廟の創建は、冊封使汪楫に清朝や康熙帝により琉球が教化されていると認識させた。そして汪楫は、康熙帝による「優遇」を琉球にて実践し^{註14)}、彼もまた、琉球に「感動」を与え、制度を復活させた人物として後世に至って顕彰されることになるのである^{註18) 5}。

一方で琉球もまた、汪楫の意見に乗じることにより、制度の復活や新たな「中国文化」の導入などを清朝側の許可のもとに行うことが出来た。こうしたことから、汪楫の来琉は、琉球が清朝の「従順な朝貢国」として振る舞うための画期と位置づけることができる。

4.2 清朝の教化を体現するもの

では汪楫は、久米村の孔子廟について、なぜ清朝や

康熙帝による「教化」であると判断し得たのであろうか。それには、少なからず琉球側の「修正」が存在した。

汪楫が孔子廟の参拝を終え、この廟がなぜ琉球に存在するのかを琉球人に尋ねると、以下のような返答があった。

聖廟の創建は、康熙8年（1669年）より始まりました。使臣が中国に入貢した際に、学宮がそびえ立ち、天下のあちこちにあるのを見て心を動かされ、帰国してからこのことを王前で陳べました。そして材を用意し職工たちに命じてこの廟がここに興ったのでございます^{註19) 6}。

ここでは、前述のように1671年（康熙11年）の請願が孔子廟創建の契機として示されているわけではなく、康熙8年（1669年）の入貢がその契機に位置づけられている。康熙8年の入貢は、康熙7年の2月に中国へ向け出航し、康熙9年の4月に帰国している。この時の使者の中には、実際に廟宇や廟地の建設に携わることになる人物も存在したが、彼の家譜において建設に携わったことは載せられるも、康熙8年の参詣時の「感動」については特に記述されていない^{註15)}。冊封使側の史料にのみ記されているという点で、史実として孔子廟建廟の始めを康熙8年に求めるには疑問が残る。

康熙8年には康熙帝みずから国学に幸じ、かなり大規模に孔子祭を行っているため^{註16)}、琉球がこれに肖ってこの年を孔子廟創建の発端の年にした可能性は否定できない。ただ、より重要なのは、汪楫が琉球側の主張する康熙8年の言説を「信じ」たことである。これにより、琉球側の述べるこうした信憑性の乏しい言説が、清朝中国に存在する孔子廟や康熙帝と結びつけられたのである。すなわち、康熙帝の国学及び孔子廟への巡幸（康熙8年）→それに肖った琉球での孔子廟創建の請願（康熙10年）と実行→康熙帝の「教化」を

体現した琉球というストーリーの確立により、清朝による「教化」を軸とした清朝と琉球の関係性が位置づけられたのである。

かくして、清朝、引いては康熙帝による「教化」と結びつけられた孔子廟創建の言説は、後の1706年に程順則が記した『廟学紀略』によって完成し、琉球国内に広まっていった。

4.3 明倫堂と孔子廟

汪楫が提案した、廟を拓げて学校とすること、つまり廟に隣接させて学校を創建する試みは1717年に実現した³⁾。この年は、冊封使徐葆光が来琉する前々年に当たる。

学校の創建を建議したのは、『廟学紀略』に孔子廟の創建や汪楫の言動を著し、久米村の最高責任者としても発言権を有していた程順則である。程順則は、1717年に出した「覚」の中で汪楫の言動に触れた後、以下のように続けている。

一つ、両勅使様（冊封正史の汪楫と副使の林麟焜…筆者注）が孔子廟の記録を細かく書き残されました。それにより、勅使様に言われた通り聖廟に学校が無いというのは中国の形式と異なり孔子廟が創建された意味がなくなってしまうというので、先年銀料を差し上げました。ですが、今まで学校の普請を仰せつけられないでいることで、勅使が渡来して来た時、琉球は聖像を仕立て拜むに過ぎず、学校で教えるということは無いと詳しく記載されてしまいでもしたら、末代に至るまで中国へ向けた琉球の外見はよくございませんでしょう。冊封使の帰国後にたとえばのような学校を建てたとしても、行う意味がまったくございません。よって、冊封使が来琉するうちに相応の御普請を命じられますよう宜しく願い申し上げます²⁰⁾ 7。

この「覚」から、汪楫の言動を意識した程順則が、冊

封使の来琉に合わせて学校を創建すべきだとしているのがわかる。王府は程順則によるこの建議を受け、1718年より孔子廟に隣接する学校、すなわち明倫堂の創建に着手、徐葆光の来琉した1719年には孔子廟の隣に真新しい明倫堂が存在していたのである。

明倫堂を見た徐葆光は、

中国には孔子廟は無く、あるのはみな学校である。

（中略）。私が冊封の命を奉じた時に、前使汪楫・林麟焜の「中山孔廟記」を読み、孔子廟の興りを知った。（中略）。大夫程順則の碑記が有り、それにより建廟が康熙13年に成ったことがわかるが、それにすら、いわゆる明倫堂については見当たらない。しかし今、孔子廟の左方には、新たに建物が創建されているのがわかる。

しかし、そもそも中国ではみな学に由って廟が有るものだが、琉球では廟に由って学が有る。曲阜で孔子廟に参拝し、そこにある供え物を観ただけだったので、どちらが先でどちらが後にくるかがわからなかったのであろう²¹⁾ 6。

とし、汪楫の記録にもない明倫堂の光景から、琉球が明倫堂を創建するまでの動機について憶測を加えている。この徐葆光の記録で注目すべきは、中国では学校が廟より先なものにも関わらず、琉球ではそれが逆で、廟から学校が出来たということに言及している点である。琉球は中国の形式を意識して明倫堂を創建したにも関わらず、廟から学校を創建した時点ですでに中国とは形式が違うということを、徐葆光には見抜かれていたのである。しかし徐葆光も、琉球のこうした本末の顛倒した行為を、汪楫同様に清朝による「教化」ととらえている点は重要である。なぜならそれは、程順則が明倫堂創建を建議した最大の理由が、明倫堂が存在しないことによる中国への体面を懸念してのことだったからである。

なお、この1719年以降、孔子廟祭祀は、久米村の祭

礼から王国の大臣たちが主催し国王も出席するような国家的祭礼へと変貌を遂げるようになった¹⁷⁾。しかし廟の管理は依然として久米村が担ったために、孔子廟それ自体は、久米村的なものと同首里的なものを併せ持った存在として機能することになるのである。

以上、孔子廟の創建から明倫堂の創建までを見てきた。孔子廟・明倫堂両者の創建に共通することは、久米村の有力者の請願があった後、久米村が主体となり、建物やその周辺を中国の形式を意識しつつ形作られたということである。そしてそれを見た冊封使が、冊封使の側からその存在に触れ、それを清朝や康熙帝と結びつけ「教化」の体現であるとした。これに対し、久米村はもちろん王府までもが、さもありませんと冊封使の言葉に乗り、「教化」の及んでいる様子を冊封使にアピールしたのである。

ここから、孔子廟・明倫堂両者の創建を琉球の「儒教化」として措定するのであれば、それはまさに、久米村を先導として中国を模倣した形式を示し、清朝側の「教化」を投げかけられると王府までもがそれに乗り、清朝側の意向に沿って振る舞ったことであると言える。久米村にとどまらず国家がこうした振る舞いをしたことにより、孔子廟や明倫堂は清朝中国の「教化」を琉球国が従順に体現していることを示す装置として機能したのである。

久米村起源のものが国家政策に結びつくという点で、17世紀後半から18世紀前半はまさに「久米村の時代」であったとしても過言ではなからう。

5 19世紀首里における孔子廟創建

1838年、首里に存在した国学の隣に孔子廟が創建された。これは、学校を先に創建して廟を後にするという中国の形式に沿っている。ところが、国学が創建されたのは1801年のことである。国学に隣接する孔子廟は、40年近く創建されなかったことになる。

そのいきさつについて、廟前に建てられた「首里新建聖廟碑文」には次のようにある。

嘉慶6年（1801年）に至って、先王尚温は国学や郷学を建てる上諭を下した。また聖廟の創建を欲し、国学の南にその場所を決めた。ゆえにその建学の碑には「廟を左にし学校を右にし、みな周りに垣をめぐらし粗石を築き、後年、廟を建てることに備えた。」とある。したがって聖廟の創建は、必ず数年のうちでなければならぬ。しかしはからずも、翌年には尚温がみまかった。その後、国家の冗費が後を絶たなかったため、結局30年あまり延びてしまったのである^{註22) 6)}。

この記録からは、国学の創建と同時に孔子廟の創建も企図しその準備を進めようとしていたこと。しかしその翌年には国王尚温が亡くなり、その影響で国家の冗費がかさむようになったために創建が延びてしまったことがわかる。

だが、孔子廟の隣にある学校を「国学」と称し、かつ中国の形式を重んじるのならば、たとえ財政難であったとしても創建が急がれたはずである。この点を、国学の創建に遡って考察する。

6 「国学」という呼称

たとえ孔子廟を備えずとも、現代でいうところの公立学校のようなかたちで学校を創建することも出来たはずであるが、なぜ王府はあえて「国学」を創建しようとしたのだろうか。

18世紀の末頃から、王府は首里に集住する諸士の教育を目的として首里に学校を建設することを企図し始める。そこで王府は、近年に迫った冊封使の来琉に合わせ、1798年に中城御殿などの公舎を「学校所」とした。1800年の冊封使来琉後、1801年に尚温の命により

学校所の場所を移し、そこを「国学」としたのである^{参2)}。

この点から、学校所設立当初、公称については王府内では特に議論されておらず、「国学」を創建するという名目の下に学校創建が進められたわけではないことがわかる。学校を創建したあかつきには、王都を代表する学問所ということでそこを「国学」と称すべきではないかという議論が出たまでであろう。

これについて王府は、久米村に意見を求めた。久米村は、首里に「国学」を創建するという意見に対し、中国の格式を備えていないという理由で「国学」に代わる公称にすべきであるという案を出した。

一つ、首里に公的な学校所を立てるということで、学校の形式について多くの書物を見合わせ議論せよとお達しに従い、書物を見合わせましたところ、北京に国子監が建てられ大学と言われています。国子監の左方には孔子廟が建てられており、国子監に入る学生はみな最初は孔子廟を参拝し、入学や1日15日にもそのようにするという礼式が『会典』や『国学礼楽録』^{註23)}に見えます。しかし今琉球に創建されようとしている学校所には孔子廟がないため、「国学」と称するのであれば、中国の形式にそぐいませぬ。そこで考えたのですが、中国の省々には「書院」が建てられているので、今回創建された学校所を「書院」と称せば中国の書院の例格に準じることが出来るのではないかと存じます^{註24)} 8。

このように、久米村からは孔子廟が無い場合は中国の例格に従って「書院」とすべきであるという意見が出されたのである。しかし王府は、久米村に対し書物を見合わせ議論せよと言っておきながらも、こうした久米村の回答を採用せず、1798年に公舎を「学校所」と呼ぶようにしたのである^{註25)} 9。だがその後、「学校所」だと中等機関に当たる三平等学校と同唱で紛らわしいという理由から、「国学」と称させてほしいという上聞

がなされ、それが採用された^{註26)}。

「学校所」と名付けられたのが1798年5月20日、三平等学校と同唱で紛らわしいという上聞がなされたのが同年の7月23日、そしてそれ以後、1799年の正月には国王の「国学」への訪問が実現したという史料の記述から^{註27)}、1801年に学校所が移転する以前から公舎がすでに「国学」と呼ばれていたことが判明する。

首里王府は、久米村の正当な提案を退けただけでなく、単に紛らわしいという理由だけで「学校所」を「国学」と称することにしてしまった。このことは、建前上これまで「儒教化」を担ってきた久米村に意見を聞くものの、王府にとっては学校を創建するという目的のもと、その呼称については特に意に介さなかったということである。同時にまた、たとえ「国学」とした場合であっても、中国の例規を厳格に満たす必要は必ずしもないという認識が王府に存在していたことを裏づけている。

こうした、「儒教化」を行ううえで中国の形式や例規を第一に重んじねばならないとする久米村の認識と、表面上は中国のやり方に則りつつも、形式や例規までも中国と同様にする必要はないという王府の認識との相違は、官生の中国への派遣や近年に迫った冊封使来琉の際に先鋭化することになる。

7 首里の学校創建と官生騒動

久米村には、従来から以下のような認識が存在した。

一つ、国家に対する仕事は、従来より首里・那覇・久米村の各役職によって棲み分けが定められております。久米村は専ら中国への対外事務のみ担って参りました^{註28)} 8。

これよりわかるのは、久米村が専ら中国向きの仕事のみを行って来たという自負をもっている点である。17

世紀以来、久米村は中国との海外事務を掌ると同時に、孔子廟や明倫堂のように中国に肖った「儒教化」を行ってきた。また、汪楫により復活がなされた官生の派遣についても同様で、久米村の中から子弟を4名選び留学させるということが久米村による重要な職務として認識されていた。

しかし、尚温が国内で即位した1795年頃から、王府はこうした官生制度の改変を企図し始めた。それと同時に、首里に学校を創建するという動きが本格化するのである。

学校創建に関しては、

（学校を）創建することにいたっては、冊封使渡来のうち創建すれば、（諸人は）修学に励み、風俗などもさらに良くなるでしょう^{註29）} 3。

とされ、冊封使来琉をめぐりなされることとなった。

また官生制度の改変は、これまで行われていた4名の官生を久米村から出すという慣例を、久米村から2名、首里から2名を出すことにするというものであった。

首里へも近々学校を御創りになるのならば、城下の貴族や諸臣から人を選び留学生として留学させ学問や政治のやり方について学ばせてくれば、取り分け公務に役立つことでしょう。それだけではなく、諸人が学問に励めば忠孝や礼儀等も厚くなり、国中の風俗が良くなり、政務補助にもなることでしょう。第一、このことは清朝の思し召しでもございますし、我が国が願ひ上げることの趣意にも叶いませう^{註30）} 10。

これは1795年に王府に提出された建議であり、王府に官生制度の改変を促したと考えられる史料である。首里からの留学生派遣は学校の創建に大きく寄与し、かつそれによって国内の風俗が良くなることは清朝にも

琉球にも都合の良いことだとされ、留学生の派遣と学校創建が結びつけられているのがわかる。王都に学校を創建することにより、首里の諸士たちも国子監に留学して教育を受けられるようになる、そうした思惑を持つ王府としては、是が非でも首里への学校創建と官生制度の改変を実現させる必要があった。そしてこれらを成し遂げるためには、首里に学校が創建されている様を冊封使に見せ、官生制度の改変を有利に持ち込む必要があったのである。官生制度の改変を図るには冊封使への請願が不可欠であることから、首里の学校創建と官生制度の改変が否応なしに結び付けられることになったのである。

これに対し、清朝との外交を直に担う久米村は、国子監への留学という特権を奪われることから、いわゆる「官生騒動」と呼ばれる暴動を起こし王府に抵抗を示す¹⁰。この暴動に手を焼いた王府は、官生の世話役である副官生を正規の官生とともに北京に派遣する。こうした、久米村からの派遣人数を減らさないという妥協策を打ち出すことで、王府は暴動を収束させることに成功するのである^{参19)}。この事件が、首里の国学成立、さらには首里孔子廟創建が大幅に遅れたことの一因となったことは想像に難くない。

8 国学と冊封使来琉

上述の通り、冊封使来琉をめぐりに学校の創建が企図され、冊封使の来琉が1800年、国学の創建が1801年になされた。官生騒動の影響のため、明倫堂の時のように冊封使来琉に創建が間に合うことはなく^{註31)}、その理由は冊封準備による財政逼迫などとされた^{註32)}。また、公舎としての「国学」はすでに存在していたはずであるが、1800年に来琉した冊封使には語られなかったのか、冊封使側の記録に「国学」に触れた記事は存在しない。琉球側が、冊封使に対し意図的に「国学」の存在を明かさなかったのであろう。

官生騒動収束の後、1801年に創建された「国学」では当初から孔子廟の創建も企図されていた。しかし1802年に尚温が急逝したために、建廟は延期されることとなる。久米村における国家祭祀の施設である孔子廟を首里に建てるということは、久米村のアイデンティティに関わるという点で官生制度の改変と同様の性格を見出せる。尚温の急逝に謎が残されているという点からみれば^{註33}、尚温の急逝による孔子廟創建の延期までを広義の官生騒動として位置づけることが可能であろう。

尚温の逝去に伴い1808年（嘉慶13年）に来琉した冊封使は、創建されていた国学に対し、

本朝に至って漸く文教をこうむり、はじめて康熙13年（1674年）に孔子廟を建て、56年（1717年）に明倫堂を併設した。尚温に及び中華の風を傾慕し、文治を広げんとすることを思い、国学を王城の北に建て、郷学を首里の三平等などの所に建てた^{註34} 。

とし、久米村の孔子廟や明倫堂と併記し、例のごとく清朝の影響により創建されたとしている。また首里の国学創建についても、冊封使には孔子廟と同様に清朝の影響によるものであると語られているのがわかる。すなわち清朝に対しては、首里における「儒教化」も、久米村におけるそれに整合させ、同じ文脈のもとに語られた。国内における位置づけは異なるも、清朝に対しては、如何なる「儒教化」も宗主国清朝による「教化」として語られねばならなかったのである。

9 久米村孔子廟と首里孔子廟の比較

以上、久米村と首里それぞれにおける孔子廟創建の経緯を概観してきた。これら、なされた時代も場所も異なる「孔子廟の創建」を比較すると、何が明らかとなるのであろうか。

まず、孔子廟と学校を創った順番であるが、久米村が廟から学校を作ったのに対し、首里では学校から廟を作った。久米村では財政改革の時期に建廟がなされたが、それは清朝の教化に乗じるための政策の一環としてなされ、それがために創建が急がれたと考えられる。

一方、首里は、中国における本来の形式である学校から廟のかたちで創建がなしたが、王府は必ずしも廟の必要性を認識してはいなかった。表向きは中国を模範とした国学ではあったが、廟が存在する必要は必ずしもないとされ、財政逼迫や官生騒動を背景に建廟が遅れることとなった。

次に創建の目的であるが、久米村は中国向けの体面を意識する傾向が強くあった。久米村は、汪楫から清朝や康熙帝による教化を強調されたことに乗じ、孔子廟を、琉球が清朝や康熙帝の教化を体現したことを示すための装置とした。

首里では、長いあいだ創建が中断していたことを気にした国王尚育の意思により、創建が再開された。久米村とは異なり、廟の創建自体が目的とされたのではなく、専ら国の最高学府である国学としての体面を備えることが目的であった。

孔子廟創建の時期には久米村でも首里でも共通して財政逼迫の渦中にあつたが、創建を急ぎ完成させた久米村に対し、首里ではそれがままならなかった。その結果、久米村では孔子廟の存在が冊封使汪楫によって清朝の教化と見なされ、それによって官生制度復活や明倫堂の創建を持ちかけられ、琉球も応じることができた。しかし首里の場合は、官生制度改変を視野に入れつつ冊封使来琉に合わせた学校創建が目指されたが、久米村の抵抗を大きな理由に結局果たすことが出来ず、すでに公舎として機能していた「国学」の存在についても、廟を備えていないことを意識してか冊封使には秘匿された。

国学創建後に来琉した冊封使は、首里による国学創建を清朝を慕って行われた久米村の孔子廟や明倫堂の

創建と同列の行為としてとらえたが、これは首里が目的遂行のために久米村による「儒教化」と整合させた語りを冊封使に対し行わねばならなかったためと考えられる。首里としては、久米村のように清朝の教化を示さなくとも首里から官生を派遣するという許可を冊封使に取り付けられればそれで十分であったが、建前上、久米村による「儒教化」の延長線上に首里によるそれを位置づけなければ、冊封使に願いを聞き届けられないと踏んだのであろう。

孔子廟創建を「儒教化」という観点からみた場合、久米村の場合は清朝への体面保持を目的とし、清朝の格式に少しでも近づこうと努力を惜しまぬ点で「中国化」とも呼び得るものであった。それに対して首里の場合は、首里士たちの教育を通しての国家統合が目的であり、その手段として久米村の意見や冊封使の協力を得ようとした様を見出せる。

以上から、「儒教化」を琉球近世の特色とするならば、みずから「儒教化」をしていくことを手段、清朝におもねることを目的とした場合、17世紀久米村におけるものと19世紀首里におけるものとは、その手段と目的はまったく逆であった。この相異は、華僑集団のアイデンティティを持つ久米村と王都である首里とのあいだで、それぞれの地域における機能や性格がそのまま反映されたものであったと考えられる。特に久米村は、中国向きの仕事を専任しているという自負を持ち、また薩摩が孔子廟を創建するに際し薩摩の命により参考となる資料を提出していることから^{註35}、「儒」に対する優越感を琉球の他の地域よりも強く持っていたと考えられる^{註36}。

こうした点から、琉球の『近世』とは、対外的には清朝の「教化」の結果として国内における「儒教化」が一元的に示されつつも、各時代、各地域の思惑のもとに「儒」を軸とした慣例や政策が併進されていた時期であったと結論づけられる。

10 おわりに

従来では、1609年から1879年までの期間が琉球の近世とされ、その期間に琉球は、国内の「儒教化」をみずから深めたとされてきた。しかし琉球で行われた「儒教化」は決して一枚岩ではなく、時代や地域によってそれぞれ質の異なるものであった。

本稿では特に、久米村と首里における孔子廟創建から、両者における質の異なる「儒教化」を明確にし、それこそがまさに琉球『近世』の特色であると位置付けた。さらに本稿の結論から言えば、17世紀後半から18世紀の前半はまさに「久米村の時代」であったが、18世紀を経てそれが次第に「首里の時代」に移行していくというのが琉球の『近世』であるということになる。

「久米村の時代」には如何にして清朝におもねり、関係を構築していくかに重点が置かれた。一方で「首里の時代」には、形式的には中国のものに合わせるが、目的はあくまで国内の振興にあった。このことを言い換えるならば、「久米村の時代」は琉球が「儒教化」していく時代だが、反面「首里の時代」は、儒教を政治的必要性により「琉球化」していく時代であるとする^{註37} ことも可能かもしれない^{註37} 参²⁰。ともあれ、「久米村の時代」から「首里の時代」への転換は18世紀を通してなされたと考えられるが、18世紀末に起こった官生騒動は、そのターニングポイントとなった事件であると捉えることが出来るであろう。

不十分ながらも、琉球に創建された二つの孔子廟に言及することで以上のようなモデルの可能性を導き出せたが、地域により質の異なる「儒教化」の位置付けははまだ不完全なものと言わざるを得ない。他にも残された課題として、「首里の時代」において首里で行われた儒教の政治利用、すなわち儒教の「琉球化」は、同時代の日本の影響を看過することが出来ないということ、さらには、王府が19世紀半ばに頻繁に来琉することとなる西洋諸国に対し「儒教化」した国内を示し

つつ「儒教的」な自画像をみずから語っていくことになるという点とも本稿で得られた視点を有機的に結び付けていかねばならない。これらを今後の課題としたい。

《謝辞》

本稿は、2016年5月26日に開催された「第61回国際東方学会議」シンポジウムIV「新出の琉球漢文資料と琉球史の読み直し」でなされた個別報告、輝広志「首里国学に関する新考察」から着想を得た。また同地にて輝氏から執筆の慇懃を得ることで執筆が実現したものである。

執筆に当たっては、前田舟子氏よりご自身の論考を提供していただいた。

末筆ながら、両氏にはこの場を借りてお礼申し上げる次第である（文責：伊藤陽寿）。

〔註〕

註1 参考文献1。本稿における年号は陽暦で表記し、必要に応じて中国年号を併記する。また引用する史料の表記はすべて常用漢字を用いる。

註2 時代区分については高良倉吉の一連の論考で紹介されているが、「近世琉球」についてより詳細な歴史的背景を論じたものとして、参考文献5を挙げておく。

また近年では、これまで使用されてきた一般的な時代区分を意図的に避け、「近世」を「琉球国後期」（参考文献21）や「後期琉球国」（参考文献22）とする研究も存在する。

註3 豊見山和行「従属的二重朝貢国＝琉球の対外関係と貢納制」（参考文献4収録）

註4 参考文献9, 167頁より、史実から田名真之はまさに蔡聖を「久米村中興の祖」と位置づけている。

註5 参考文献10, 100頁より、渡辺美季は、1706年に程順則の著した『廟学紀略』が、琉球の儒教が中国から久米村に伝来したことを示す一方で、日本の儒教的な影響を同著が完全に排除していると指摘している。

註6 琉球の「家譜」は数年おきに王府への提出が義務付けられていた点で、私文書とは異なる。以降では単に家譜と表記する。

註7 於治公之余常講經学、教育人材。因此唐榮後生之徒、經学日進、人材蕃衍。雖海東之國、礼学文章、殆与中華無異矣（引用文献1, 941頁。なお漢文史料についてはすべて、句読点は筆者に拠る。）。

註8 色々独吟味ニ而仕置相改候付、二三年内ニ百姓緩々与罷成候。我非老人之私言候。諸人所見知候。前々与ハ各別之儀候事（引用文献2, 46頁）。

註9 「程氏家譜」（引用文献1, 544頁）に「始議創建聖廟、請撰政向氏羽地王子朝秀。」とあることから、金正春が羽地に請願をしたのは明らかである。

註10 完成年代については、史料により若干の誤差がある。詳しくは、参考文献11を参照。

註11 左候得者御当国ニ而始而聖廟御建立為被遊段、委碑文ニ仕付置候者、唐式相叶弥永代之御考可被成候処、今通碑文相立不申候得者、自然押延、至後年廟御建立之様子且又御祭始候由来忘却仕候半念遣千万奉存候。此節之儀者右廟大條葺共被仰付仕合御座候条也、唐之聖廟之様碑文御立被下度奉候（引用文献3, 63頁）。

註12 琉球において中国を指す用語。また転じて「あの世」を指す呼称でもあり、「ト一」と発音する。日本と並称され、「唐・大和」（ト一・ヤマトウ）とされる場合が多い。

註13 登岸入館之次日、例当行香。通事以天妃宮・至聖廟告。（中略）。攷之、前録未聞國中祀孔子。慮別有所謂至聖者。（中略）。入廟昇堂攀帷審視、

然後下階肅拜如礼（汪楫；使琉球雜錄，一，使事，十三 - 十四葉。なおテキストは、引用文献 4，卷末の影印版を用いた。）。

- 註 14 自州県皆得建学、而吾孔子之廟祀始遍天下。然学以外無所謂廟也。（中略）孔子之祀、行於廟、而備於学、嗚呼至矣（前掲註 13，二，九葉「附臣楫纂琉球国新建至聖廟記」）。
- 註 15 今天子重道崇儒、常以興教化、勤学校、考吏之殿最。於是職方版図、莫不以修学新孔子廟為務（前掲註 14）。
- 註 16 皇清受命、首列藩封歷三十年、而祀聖人於今天子踐祚十年之後。謂非皇帝盛德大業度越千古有以漸被之而然歟（前掲註 13，十葉）。
- 註 17 今日者、廟既成矣。因廟而擴之為學、則費不繁而制大備。（中略）。扱國中敦行誼工文章者、為之長、俾以時訓督其子弟修學積業積奠之礼。国之中、或難其選則直疏其事而請於朝、乞如往昔教育故事（前掲註 13，十一葉）。
- 註 18 碩言語、尤得要領、琉球君臣相与感動懾服、請以子弟入太学。蓋通道以来未有也（引用文献 5，百六十二 疆臣十四 六葉「汪楫」）。
- 註 19 聖廟之建、肇自康熙八年。陪臣入貢中国、見夫学宮巍峨布滿天下、瞻慕感動、歸而陳諸王前、度材命工、厥廟斯興（テキストは、引用文献 6，143 頁，「琉球国新建至聖廟記」）。
- 註 20 一 右兩勅使様より孔子廟之記、具ニ被書置候。然者勅使様被申置候通、聖廟ニ学校所無之候得者中国之法式致相違、却而孔子廟御建立為被遊詮無御座候付、先年料銀差上置候処、今迄御普請不被仰付候得者、自然勅使御渡來之時、琉球之儀者聖像計御仕立拜候迄ニ而学校之教者無之由記載せ、委御仕付被成候ハ、末代ニ到迄御外聞向不可然候。縦令冠船以後ニ到り何様之御普請被遊候共、無甲斐儀之奉存候条、冠船内ニ相応之御普請被仰付被下候様、宜御取成御披露頼上候、以上（引用文献 7，431 - 432，28「覚」）。
- 註 21 中国無孔子廟、皆学也。（中略）。余方奉使時、檢前使刻録、読汪林兩使臣中山孔廟記、知其興起也。（中略）。大夫程君順則、有碑記。建廟顛末、寔成於康熙之十三年甲寅之歲、時尚未有所謂明倫堂也。今觀其廟之左方、有室新建。（中略）。夫中国皆由学而有廟、今中山則由廟而有学。登闕里之堂、而觀其車服礼器之維一、又何先而何後歟（引用文献 6，186 - 187，徐葆光「琉球新建儒学碑記」）。
- 註 22 至嘉慶六年辛酉、先王諭建国学郷学、又欲建聖廟、卜地国学南。故其建学碑云。左廟右学、皆繚以周垣、築以礪石、而建廟俟其後年。則是聖廟之建、必当在数年之中。不料、越明年壬戌、先王薨。其後国家冗費接踵、帑項不敷。是以延至三十余年（テキストは、引用文献 6，311 頁）。なお原文中の礪石は、多くの辞書においては「といし」を示すのみであるが、『漢語大詞典』は主に清代以降の出典から「一般に粗石を指す」としている。これに従い、本文中の訳はこちらを採用した。
- 註 23 『国学』や『礼学』、もしくは『国学礼学』といった書物は管見の限り存在しない。よってこれは、国士監祭酒である李周望により康熙 58 年（1719 年）に成った『国学礼楽録』のことであると考えられる。テキストは参考文献 18 を参照した。
- 註 24 一 首里公向学校所被召立候付而、学校之仕向諸書物見合、諸大夫吟味ヲ以可申上旨被仰渡候趣、承知仕候。依之諸書物見合候処、於北京、国子監被召立大学ト申。左方至聖廟被召立、入監之面々始而聖廟御参拜仕候而、入学且朔望毎礼式方有之由、会典並国学礼学ニ相見得申候。然者今被召立候学校所之儀、聖廟無之候而国学と唱候へハ、唐之御仕向ニ相当不仕候。依之相考候へハ、唐省々書院被召立置候間、此節被召立候学校所之儀、書院ト唱候へハ、唐書院之例

格ニ準、相当可仕哉ト奉存候。此段申上候、以上(引用文献 8, 学第二十五号。また、参考文献 2, 121 頁にも本史料が一部引用されている。なお引用文献 8 を利用して官生騒動や副官生の派遣を解明した論考として、前田舟子(2015)「首里国学と久米村」(『トランスナショナルな文化伝播 - 東アジア文化交流の学際的研究』琉球大学法文学部・台湾大学文学院国際学術交流シンポジウム)を挙げておく)。

註 25 学校所の儀(中略)、唱の儀於唐無之所は書院と申由候得共、学校所江名付可申事(引用文献 9, 46 頁)。

註 26 学校所の儀、三平等学校と同唱にて紛敷有之差支申候間、向後国学と唱候(前掲註 25, 47 頁)。

註 27 前掲註 25, 47 頁

註 28 引用文献 8, 学第二十五号。

註 29 弥被召立儀ニ候ハ、冠船御渡来内相建候へ者、修学相励風俗等も猶以宜相成候(引用文献 3, 29 頁)。

註 30 首里江茂追々学校所被召建管候得ば、御城下貴族諸臣之内よりも人品御見合を以官生被差渡学問又は御仕置筋を茂随分心掛習受来候はゞ、格別御用に相立候儀共段々可有之事に候。夫而已ならず往々諸人学問相励忠孝礼讓等之心懸、猶々厚國中風俗宜敷御政務御補助にも相成候儀に而、第一天朝之思召にも被為叶御当国御願立之御趣意にも相叶(引用文献 10, 172-173)。

註 31 この時の冊封使は、嘉慶 5 年(1800 年)11 月に帰国している。

註 32 学生たちの学問への姿勢に対し、財政逼迫のなか国学創建を急いだ意味を悟す令達が存在する(引用文献 3, 32 頁)。

註 33 なお、尚温の急逝は毒殺説などが存在する(引用文献 10, 183 頁)。また喜舎場朝賢によると、尚温は鬢疽、すなわち原因不明の発疹が出る熱病の一種であったとされる(喜舎場朝賢(1980)

『東汀随筆』ペリかん社, 86 頁(成立は 1913 年))。

註 34 本朝漸被文教、始於康熙十三年啓建聖廟、五十六年添設明倫堂、及尚温傾慕華風思広文治、建国学於王城北、建郷学於三平等処。(後略)。(斉鯤『続琉球国志略』(巻二, 学校)二十葉。テキストは引用文献 11, 巻末の影印版を用いた)。

註 35 引用文献 7, 638 頁・932 頁

註 36 こうした点について昨今、首里王府はみずから「儒教的文脈においては日本を凌駕する王国」と認識していたとする説があるが(たとえば渡辺美季;三人の「琉球人」,勝方=稲福恵子等編,沖縄学入門 空腹の作法,昭和堂,2010)、琉日関係においてではなく、琉球国内においてこうした首里王府の認識にどれほど久米村や久米村人が関わっていたのかを検討していくことは、今後の課題となるであろう。

註 37 澤井啓一は、琉球では儒教が村や村落といった公共空間にから国家経営に応用されていることを大きな特徴と捉え、これを「儒教が琉球化していく」と表現している。澤井が前提としている見解とはだいぶ異なるが、本稿で示した首里の「儒教化」は、王府が政治的に儒教を「琉球化」という点で澤井の見解と一致するため、ここに引用することとした。

[参考文献]

- 1) 沖縄タイムス社編;沖縄大百科事典《中巻》,沖縄タイムス社,1983(国吉有慶;孔子廟,64 真栄平房敬;首里聖廟,398)
- 2) 眞境名安興;沖縄教育史要,沖縄書籍販売社,1965
- 3) 糸数兼治;琉球における孔子祭祀の受容と学校,国立歴史民俗博物館研究報告,106:2003
- 4) 豊見山和行;琉球王国の外交と王権,吉川弘文館,2004

- 5) 渡辺美季；近世琉球と中日関係，吉川弘文館，2012
 - 6) 喜舎場朝賢；琉球見聞録，至言社，1977，24（初版は1914年）
 - 7) 伊藤陽寿；久米村孔子廟創建の歴史的意義—17世紀後半の政治史的視点から—，沖縄文化研究，36：2010
 - 8) 琉球国由来記，琉球史料叢書，1，東京美術，184，1972（史料成立は1713年）
 - 9) 池宮正治等編；久米村，ひるぎ社，1993
 - 10) 渡辺美季；東アジアのなかの琉球，岩波講座 日本歴史，12，近世3，岩波書店，2014
 - 11) 伊藤陽寿；琉球の編纂史料にみる孔子廟創建年代の〈齟齬〉，沖縄文化研究所所報，58：2006
 - 12) 伊藤陽寿；清代冊封使の派遣実施の議論と冊封使の請願 - 清代第二回目の冊封琉球使について - ，32：2008
 - 13) 陳捷先；華夷秩序と琉球王国，麻生伸一訳，中琉関係の持続・強化に対する康熙皇帝の貢献，榕樹書林，2014
 - 14) 上江洲安亨；清朝初期における琉球国の官生派遣の復活について，沖縄文化研究，24：1998
 - 15) 八世都通事諱正華；那覇市史資料篇 第1巻6（家譜資料二（上）），那覇市企画部市史編纂室，1980，59
 - 16) 大清聖祖仁皇帝實録（卷二十八 十八 - 十九葉），新文豊出版公司，1978，413 - 414
 - 17) 豊見山和行；祭天儀礼と宗廟祭祀からみた琉球の王権儀礼，前掲参考文献4収録
 - 18) 国学礼楽録（四庫全書存目叢書，史部271），荘巖文化事業有限公司，1997
 - 19) 前田舟子；副官生派遣をめぐる琉中間の議論，琉大アジア研究，10：2010
 - 20) 澤井啓一；琉球と朝鮮の儒教，村井章介等編，琉球からみた世界史，山川出版社，2011，113
 - 21) 豊見山和行；琉球言葉と大和言葉をめぐる外交と交流，沖縄文化，50（1）：119，2016
 - 22) 上原兼善；近世琉球貿易史の研究，岩田書院，2016，1
- 〔引用文献〕
- 1) 那覇市史資料篇 第1巻6（家譜資料二（下）），那覇市企画部市史編纂室，1980
 - 2) 羽地仕置，沖縄県史料 前近代1 首里王府仕置，沖縄県教育委員会，1981
 - 3) 那覇市史資料篇 第1巻10（琉球資料（上）），那覇市企画部文化振興課，1989
 - 4) 原田禹雄訳注；冊封琉球使録三篇，榕樹書林，1997
 - 5) 国朝者獻類徴，一，江蘇廣陵古籍刻印社，1990
 - 6) 塚田清策；琉球国碑文記の定本作成の研究，啓学出版，1970
 - 7) 那覇市史資料篇 第1巻11（琉球資料（下）），那覇市企画部文化振興課，1991
 - 8) 琉球資料（琉球資料巻之六十 政治 学制及文事），東京都立中央図書館蔵（特別買上文庫 4133 1（特別買上文庫の目録には「琉球学制文事資料」とある。））
 - 9) 豊見山和行；史料紹介 国学規模帳・国学公事張について，浦添市立図書館紀要，4，1992
 - 10) 伊波普猷；官生騒動に就いて，古琉球，岩波書店，2000（なお初出は明治44年（1911年）4月2日「琉球新報」、のち、昭和17年（1942年）に改稿。）
 - 11) 原田禹雄訳注；続琉球国志略，榕樹書林，2006

‘Early Modern Era’ of Ryukyu Observed from the Establishment of Mausoleum of Confucius.

Izuru KAMATA Youjyu ITO

Two Confucius’ Mausoleums in Kumemura and in Syuri once existed in Ryukyu .Kumemura was built in the latter half of 17th century and Syuri was built in the middle of 19th century, but they were established with each different intention.

The establishment of two Confucius’ Mausoleums is different in time and place. In this theme, the motivation and the significance of existence should be compared, and the role of Mausoleum of Confucius in Ryukyu in the early modern era should be made clear.

In general, the early modern era in Ryukyu was from Satsuma invasion in 1609 to Japan occupation in 1879. In this period, Ryukyu was ruled by both Japan and China, but the period suggested that the image of the nation should be established in Ryukyu.

Confucius’ Mausoleum in Kumemura in 17th century played a significant role to improve the position of Ryukyu. Ryukyu appealed to the messenger of Qing Dynasty who happened to visit Ryukyu that it had Confucius’ Mausoleum originated from China. It showed that Ryukyu would be obedient to Qing Dynasty which became a newly born dynasty in China. This incident indicated that Ryukyu was successfully able to continue to establish a good relationship with Qing Dynasty for about 200 years.

It was Kumemura that built Confucius’ Mausoleum and made Ryukyu be obedient to Qing Dynasty. It becomes clear that this era can be described as Kumemura period.

On the other hand, in 19th century, another Confucius’ Mausoleum was built in Syuri, the capital of Ryukyu. The reason why this Confucius Mausoleum was built was not to appeal to Qing Dynasty, but to make it become the monument of promoting study in Ryukyu.

Accordingly, of two Confucius’ Mausoleums, one was built in Kumemura, which was the measure to have a good relationship with Qing Dynasty. Another was built by the Ryukyu nation, and became the monument of promoting study. It should be mentioned that the early modern era in Ryukyu included both Kumemura period and Syuri period which were different in quality.

Consequently, two Confucius’ Mausoleums were the mirror reflecting the times in 17th century and in 19th century when each was established.